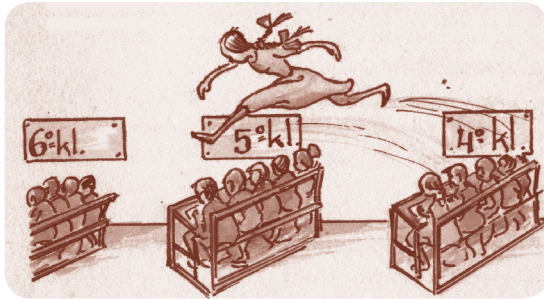


2011年12月

やかまし ネットワーク

NO.43

岩波書店児童書編集部



「父さんの手紙はぜんぶおぼえた」より

もくじ

鼓の音のように (2)

オランダの冬のお祭／モナ・リザの自分語り (3)

カリブ海の伝説／情けないけどかっこいいトラ (4)

こころの家／中国の民話 孟姜女のものごと (5)

抱きしめたい手紙 (6)

愛は宗教を超える／私は生きたい。生きのびたい。 (7)

少年文庫の新刊から (8～9)

宮崎駿監督が語る少年文庫／岩波ジュニア新書で英語を (10)

2011年児童書新刊一覧 (11)

年末年始に読む本 (12)

鼓の音のようこ

長谷川撰子さんが去る10月18日に逝去されました。心より哀悼の意を表します。

長谷川さんは四〇年間、子どもと本にかかわってこられました。四人の子育てだけでなく、自宅で夫の宏さんが開いた「赤門塾」で、また六年間保育士をされた後はじめた文庫「おはなしくらぶ」で、さらに地元の保育園で、いつも子どもたちに「おばちゃん」と慕われる信頼関係を作りながら、絵本をいっしょに読んできたのです。同時に、読書会を長年続けている大人の仲間も大切にされてきました。そういった地域に根付いた日常の交流から得た経験が、圧倒的な厚みをもって、長谷川さんご自身を、そして豊かな創作活動を支えていたのだと思います。

昔話の楽しみを絵本の形にした〈へのひらむかしばなし〉(全20冊)は、そんな長谷川さんあつてこそ実現したシリーズでした。長谷川さんの身体をくぐりぬけて紡がれる言葉にはリズムがあつて、土の匂いがあります。読者の皆さまからは、くり返し読むほど楽しくなるという声が多く寄せられました。

当初、文体を模索した時期があつたのですが、その頃のノートを見ると、長谷川さん曰く「私の言葉が大人と子どもとの間で生きてくれることが大事」とあります。また「絵は絵本の中心的な語り手、文はその語りを生かす鼓のパーンという音のようにおかれねばならない、と思っている」ともおっしゃっていました。

画家さんから預かったラフ画や本画を持って仕事場を訪ねるときは、毎度緊張しました。「絵と文のせめぎ合いをぎりぎりまでもつていつて融合させたい、そうして子どもの胸に届く絵本を作りたい」という姿勢で、画家さんに気になったことを投げかけるのです。長谷川さんの意見は率直で、絵本読みの経験に裏付けられた説得力がありました。画家さんがそのボールを受け止めて力強く投げ返してくださる。今度は文のほうにも大胆に手を入れる。このキャッチボールに何度ぞくぞくさせられたかわかりません。

文だけを書くのではなく、絵本一冊まるごとについて徹底的に考え抜く長谷川さんのまなざしから、私は、子どもの本を作るという最高におもしろくて恐ろしい仕事に携わるうえで大事なことを、たくさん教えていただいたと噛みしめています。

根っからの本好き、言葉好き、美術好き、そして大の料理好き。早起きして『源氏物語』を読んだり、かと思えばチェコ語にハマつたりと、知的好奇心の尽きない幅広い教養の持ち主でありながら、けつして頭でつかちにならず、柔軟にものごとを考える達人。原稿を送つてくださるときに「毎日、雨、雨、雨。時雨れて落ち葉はみんなコンクリにはりついて、はあ、なさけなや、くたびれたお父さんみたい」などと書き添える遊び心もあつて、朗らかによく通る声で笑う姿が思い起こされます。

長谷川さんが著した数々の絵本や読み物、絵本論、エッセイなどをこれからも読むことができるのは、なんと幸いなことでしょうか。最新刊『家郷のガラス絵』(未來社)には、子ども時代をどっぷりすごした出雲の記憶が濃やかに綴られています。

オランダの冬のお祭

この春復刊した、『イップとヤネケ』の番外編です。イップとヤネケは、家がおとなりどうしで、大のなかよし。ふたりがシンタクラースを待つ日々をつづる、十話を取めます。たくさんの方からさし絵が、物語を目にも楽しく彩ります。

シンタクラース？ サンタクロースのまちがいかしら？ とお思いの方、いえいえ、似ていますが違うのです。シンタクラースは寒い冬のさなか、白馬に乗り、お供のピートをつれて、子どもたちのもとへやってきます。子どもたちは、お手紙を書いたり、白馬のために靴にニンジンを入れたりして、プレゼントを待ちます。本作は、プレゼントを楽しむに万国共通の気持ちを丁寧にひろいあげ、かつ、日本にない冬のお祭をうかがい知ることでもできる、魅力に富む一冊です。

作者シュミットは今年生誕一〇〇年。作品を続々刊行中です。



ぜひご注目ください！ (熊倉)

■ イップとヤネケ

シンタクラースがやってくる！

アニメー・M・G・シュミット作／フィ
ープ・ヴェステンドルフ絵／西村由美訳
A5判・上製・48頁 【11月刊】

一三六五円(小学1・2年から)

モナ・リザの自分語り

世界一有名な絵画『モナ・リザ』。イタリアのレオナルド・ダ・ヴィンチが四年もかけて描いた『モナ・リザ』は、後にフランス王家の手にわたり、ナポレオンの時代にパリのルーヴル美術館にかざられました。

ところが、あるとき、事件が起こります。『モナ・リザ』が消えたのです！ いったい、どこへ？ ぬすんだのはだれ？

謎のほほえみをたたえる『モナ・リザ』自らが、五百年にわたる身の上について、秘密を解き明かすように物語る、ユニークなスタイルの絵本。盗難事件は一九一一年に実際あったことです。

レンガ色や紺色を基調にした絵が、内容にふさわしい雰囲気をも出ししています。翻訳は、子どもとアートをつなぐ斬新なワークショップや連載で活躍中の結城昌子さんにお願ひしました。名画にぐっと親しみがわく楽しい一冊、おすすすめです。(愛宕石)



◆ モナ・リザをぬすんだのはだれ？

【9月刊】

ジル・マックエルマリー文
ルーシー・ナツプ絵／結城昌子訳
280×215mm・32頁

一五七五円(小学1・2年から)

カリブ海の伝説

舞台は、海や、草木や、鳥たちが、濃い色彩を放つ南の島。そこに、ひっそりとシグアパたちは暮らしています。月夜にかがやく、黄金色の肌と漆黒の髪。人間をつくりで、しかもとびきり美しいといわれる伝説の生きものです。

人間を恐れる彼らには、すみかを探られないようにするための大切なひみつがありました。それは、後ろ向きについた足。しかしそのひみつが、好奇心おうせい、元氣りんりんのシグアパの女の子のせいで、人間にばれそうになってしまいます……。

ドミニカ共和国で幼少期を過ごした作家、アルバレスが、郷土の伝説に息を吹き込み、ふしぎな、楽しい物語に仕立てました。ラテンアメリカにルーツをもつ異才、ネグリンの絵は、忘れがたく強烈な印象を残します。

漂う異国情緒に、目と心をうばわれる一冊です。(熊倉)



◆ひみつの足あと 【8月刊】

フリーア・アルバレス文

ファビアン・ネグリン絵

神戸万知訳

28.5 × 22.1cm・34頁

一五七五円〔5・6歳から〕

情けないけどカッコいいトラ

いいなあ。オレもなかまに入りたいなあ……。骨と皮ばかりにやせこけたトラが羨望のまなざしで見つめるのは、なんと宮殿のひろまで楽しそうにごはんを食べている王さま一家。

ある日、宮殿の庭にトラ皮のじゅうたんが干されているのを目にしたトラは、とんでもないことを思いつきます！ 猛獣の威厳はどここへやら。すなわち、トラはじゅうたんになりすまして宮殿の広間にしかれ、ごちそうにありつく念願の生活を手に入れたのです！ でも、正体がばれるのは時間の問題……！

おとぼけトラのゆかいな絵本。ローズ作品の大ファンでもあるふしみさをさんの軽やかな訳文を得て、読み聞かせにぴったりの一冊になりました。お話と絵の調和がみごとです。『ウィンクルさんとかもめ』（ケイト・グリーン・ナウエイ賞受賞作）や『おおきなかしの木』も、この機会にぜひご覧ください。(愛宕)



◆トラのじゅうたんに なりたかったトラ

ジェラルド・ローズ文・絵

ふしみさを訳

28.0 × 21.5cm・32頁

一四七〇円〔3・4歳から〕

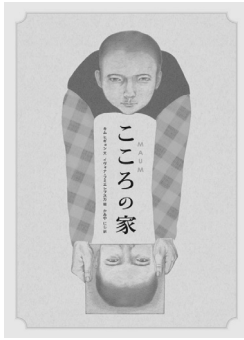
一四七〇円〔3・4歳から〕

こころの家

こころって、いったいなんだろう。人間のこころを私たちの住む家にたとえて、さまざまなかころの姿を浮かびあがらせる、韓国のちよつと変わった絵本をご紹介します。今年のポローニャ・ラガツツイ賞（ノンフィクション部門）に輝いた話題作です。

「だれにでも、こころはある／むくちな かあさんにも／すみっこで あそぶのがすきな ともだちにも／うまれたばかりのあかちゃんにも／はげあたまの校長先生にも、こころはある」

詩のような文と、ポーランド人画家による洗練されたイラストレーション。ご注目いただきたいのは、頁を開いたり閉じたりするとき、一見シンプルで静かな絵が、動くように、あるいは立体的に見えるように工夫して描かれていることです。視覚的にもしろいだけでなく、言葉とあいまって、興行きのある表現を生み出していて感動的です。どうぞご期待ください。（愛宕）



◆ こころの家

【3月刊行予定】

キムヒギョン文

イヴォナ・フミエレスカ絵

かみやにじ訳

26.7 × 19.3cm・58頁

一六八〇円〔小学3・4年から〕

中国の民話 孟姜女のものごと

孟姜女（もうきょうじょ）と漢字で書くとひびきも硬く、いかめしい印象があります。北京語で読めば、モンジャンニュー。意味は孟家と姜家のむすめ。日本ではあまり知られていませんが、中国では知らない人はいない、有名な民話の主人公です。

子どものいない孟と姜の二組の老夫婦のもとに、ツバメによって授けられた少女、孟姜女。かしく美しい女性へと成長した孟姜女は、青年、万喜良（ワンシーリャン）と恋に落ちますが、結婚式の日、喜良は〈万里の長城 建設の労役にとられてしまいます。孟姜女は、夫をあきらめることができます、中国の南から北のはての〈万里の長城〉まで、千里をかける旅に出るのでした……。

文章をまとめてくださるのは〈三国志絵本〉の唐亜明さん。絵は中国の画家、蔡皋（さいこう）さん。蔡皋さんは、『桃源郷ものがたり』（松居直文、福音書店）を手がけられているほか、少年文庫『聊斎志異』のさし絵も担当されています。

万里の長城という誰もが知っている遺跡にまつわる、悲劇の物語。春に刊行すべく準備を進めております。乞うご期待！

（須藤）

◆ なみだでくずれた万里の長城

【春刊行予定】

中国の民話

唐亜明文／蔡皋絵

48頁・一八九〇円〔小学3・4年生から〕



抱きしめたい手紙

「また、おうちで会おうね。戦争がおわったら、すぐに——」
ナチス・ドイツの占領下、オランダにも「ユダヤ人狩り」の嵐が吹き荒れました。学者の父親が大学を追われると、ファン・デル・フーデン一家は散り散りになり、末娘のリーネケは隠れ家を転々としたのち、遠い村の医者コーリー夫妻の家に預けられました。

食料もままならない窮乏、いつ密告されるかわからない恐怖、友だちにも自分の本当の名前や家族のことを話せない孤独、そして大好きな両親や姉姉と会えない寂しさ——それでもリーネケは疎開してきた村医の姪っ子として学校に通い、健気に日々を乗りこえていきます。

一〇歳の少女の心の支えとなったのは、ひそかに届く父さんからの絵入りの手紙でした。小さな冊子のかたちに綴じられた絵入りの手紙は、リーネケの心を楽しませようとする父さんのユーモアと愛情に満ちあふれています。

手紙はすぐに破棄しなければなりません。周囲にまで危険がおよぶから。けれども村医は、九通の手紙を焼かず、庭の地中に埋めたのです。奇跡的にのこっていた手紙は終戦後リーネケの手に渡され、現在は、貴重な歴史ドキュメントとして、イスラエルの口ハメオ・ハゲタオット記念館に展示されています。

この本は、リーネケ本人（現在七八歳）から、作家シエムトヴが当時のことを聞き、オランダの街や村を訪れ、読み物にまと

めあげたものです。リーネケがくり返し読んで味わった父さんの手紙が、すべてカラーで織り込まれています。その色彩の鮮やかなこと！愛らしい絵の一つ一つに、ため息がこぼれます。

リーネケのいきいきとした心の動き、表情とともに、人間の生命や尊厳がおびやかされていた時代に迷わず手をさしのべてくれた善意の人々や、地下抵抗運動を貫いた人々の姿も、くつきりと浮かび上がってきます。

「回想記には誇張や感傷が入りやすいが、この本は飾り気のない素直な筆致で普遍性、文学性がある」と訳者の母袋夏生さん。ヘブライ語からの翻訳に全力を注いでくださいました。本書は、イスラエルの国立ホロコースト記念館のヤド・ヴァシエム賞、優れた児童書に与えられるゼヴ賞を受賞、ドイツ児童文学賞にもミネートされています。

「子どもだけでなく、父親にも母親にも読んでもらいたい」「リーネケと一つの心臓になったように、悲しくなったりうれしくなったりした」「その後のことにも触れていて深い余韻を感じた」など、感想が続々と寄せられています。

造本にもこだわりました。ぜひご一読ください。（愛宕）



■ 父さんの手紙は

ぜんぶおぼえた

【10月刊】

タミ・シエムトヴ／母袋夏生訳

A5判変型・上製・二七〇頁

二二〇五円（中学生から）

愛は宗教を超える

一九二二年、エルサレム——キリスト教とイスラム教、ユダヤ教という、三大宗教が交錯する聖地を舞台にした、壮大な愛の物語。十字軍との死闘の末、聖地を手に入れたイスラムの名主サラディンは、捕虜のうち一人の青年騎士だけ殺さずに助けた。そして、その青年騎士は、ぐうぜん通りかかった火事の中から、賢者と呼ばれる裕福なユダヤ商人ナータンの一人娘レーハを救いだす。一つのおこないをきっかけに、人びとがつながっていく……。

キリスト教徒の青年騎士とユダヤの少女レーハは、ためらいながらも惹かれあい、サラディンとナータンが親交を深めるなか、得体の知れぬ大きな陰謀がかれらをのみこんでゆく。

「三つの宗教で、どれが唯一、真実の宗教か？」サラディンが投げかける難問へ、賢者ナータンがどう答えたかにご注目。

宗教のちがいを超え理性へと至る道、寛容を説いた十八世紀ドイツの名作戯曲『賢者ナータン』を現代版にリメイク。魅力あふれる人物たちのモノローグが織りなす、今なお新しい物語です。



■ 賢者ナータンと子どもたち

【11月刊】

ミリヤム・プレスラー作／森川弘子訳

四六版・並製カバー・三三六頁

一九九五円（中学生から）

私は生きたい。生きのびたい。



「シベリアに追放された人間にとって、結果はふたつしかない。成功とは、生きのびること。失敗とは、死ぬこと。私は生きたい」リナは十五歳、画家になることを夢見て、リトアニアで幸せに暮らしていました。一九四一年六月のある晩、突然ソ連の秘密警察が乱暴に家に踏み込んできます。「二〇分でしたくしろー」シベリアの強制労働収容所への長い旅の始まりでした。

母親と弟とともに連れてこられた極寒の地で、過酷な労働と飢え、仲間の死に耐えながら、リナはどこか遠くの収容所にいる大好きな父親のため、そして、いつか自由になれる日を信じて、日々の記録として絵を描きためていきます。別の収容所に移送される日、お互いに恋心を抱いているアンドリウスはリナに約束します。「いつかリトアニアに戻ろう。必ずきみを見つける」と。

祖父がリトアニア軍将校だったという作者は、なんとアメリカの第一線で活躍する音楽プロデューサー。シベリアの収容所からの生還者に直接取材をして生み出されたこの作品は、重厚さとエントナーテイメント性を兼ね備え、世界十数カ国で読まれています。不幸な時代を力強く生き抜いたリナたち。圧巻のラストを読み終えて、人間の真の強さ、尊厳とはなにか、考えています。（石橋）

■ 灰色の地平線のかなたに

【1月刊行予定】（中学生から）

ルーター・セペティス作／野沢佳織訳 四六判・並製カバー・四〇〇頁

少年文庫の新聞から

● オオバンクラブ物語 (ランサム・サーガ5) 上下

(アーサー・ランサム作／神宮輝夫訳)

【10月刊】

『長い冬休み(ランサム・サーガ4)』で登場したディックとドロシアが、今度はイングランド東海岸の水郷、ノーフォークにやってきました。ノーフォークは、湖や沼が川でつながって、海に注ぐ湖沼地帯。人々の生活と、船が密接なかかわりをもっています。

ディックとドロシアは、ここで地元の少年トムと知り合い、念願のセーリングを学ぼうと、期待に胸をふくらませます。ところがほどなくトムが、オオバンの巣を守ろうとして、勝手放題の観光客たちの船を流し、逆恨みを買ってしまいます。

敵の目をくらまして帆走に出たトムたち。船から船へ乗りついであとを追う、ふたごのボートとスターボード。しつこくトムを探そうとする観光客。水辺の追跡劇のはじまりです。

ゆたかな水の流れ、ふいにあらわれる霧、突然のあらしに雷、



大小様々な船に、鳴き交わす水辺の鳥……。ランサムが土地の情景を、愛情込めて描いています。

舟崎克彦さんが、さし絵付きのすばらしい解説を書いてくださいました。(須藤)

● 小公子

(フランシス・ホジソン・バーネット作／脇明子訳)

【11月刊】

たいへんお待たせしました！ バーネットの名作『小公子』がいよいよとした新訳でよみがえりました。翻訳は、子どものころ、この作品が大好きだったという脇明子さんです。

主人公の少年セドリックは、一度も会ったことのない祖父のあとつぎになるために、生まれ育ったアメリカを離れ、イギリスに渡ることになりました。広いお屋敷に暮らす伯爵の祖父は高慢で頑固な人物でしたが、セドリックの無邪気で温かい心によって、しだいに変わっていきます。

思いやり深い母親、親友である食料品屋のホップスさんや靴磨きのディックなど、セドリックを支える大人たちも魅力的です。一二〇年以上前に書かれた作品の背景や舞台についての解説も充実。小西英子さんが、丁寧な筆遣いでさし絵を描いてくださいました。(愛宕)

● アーベルチェとふたりのラウラ

(アニー・M・G・シュミット作／西村由美訳)

【12月刊】

空飛ぶエレベーターでの奇想天外な旅を描いた『アーベルチェの冒険』から一年。アーベルチェたちが再会を喜びあつたのもつかの間、大切な友だちラウラが、奇術師の箱に入ったきり、そのまま失踪してしまいます。魔法の効き目がありすぎたのか、はた

またトラ使いに誘拐されたのか。アーベルチェたちは、トレーラーハウスでラウラを探しに出発しますが、思わぬ事件にまきこまれ……。

アーベルチェたちのおぼけたやりとりがウフツと笑い、おもしろい食べ物の描写にうっとりし、ドキドキハラハラの展開に引き込まれ、すべてが収束する

結末に大きくひと息。「オランダのほんとうの女王」シュミットの筆が冴え渡ります。さし絵はテー・チョンキン。(熊倉)



● エーミルはいたずらっ子

(アストリッド・リンドグレン作／石井登志子訳)

リンドグレンの傑作が、少年文庫で登場します。

エーミルは五歳。まんまるの青い目に金髪で、天使のような男の子です。ところがどっこい、彼の行くところ、かならず嵐あり。牛のように力強く、頭の回転の早いエーミルが、素直な心そのまま行動すると、それは突拍子もないはずとなり周囲の度肝を抜くことになってしまふのです。

エーミルは、スूप鉢に頭をつっこみ抜けなくなったり、妹のイーダを旗柱に宙ぶらりんにしたりと大胆かつ奔放。ビヨロン・ペリーの絶妙なさし絵



とあいまって、読みながらゲラゲラ笑いが止まりません。

全六作発表されている「エーミル」シリーズのうち、六〇年代に執筆された前期三作を、石井登志子さんに訳しおろしていただきます。続刊「エーミルとクリスマスマスのごちそう」「エーミルの大切な友だち」もお楽しみに！(熊倉)

● 二年間の休暇 上下

【2月刊行予定】

(ジュール・ヴェルヌ作／私市保彦訳)

日本では「十五少年漂流記」というタイトルでもおなじみの、ヴェルヌの冒険小説です。休暇で帆船スルギ号に乗って、ニュージールランドの沿岸を一周する予定だった十五人の少年たち。ところが船が漂流して、嵐のはてに、無人島に漂着してしまいます。少年たちは流れついたその島をチエアマン島と名づけ、力を合わせて島での生活を切り開いていくのです……。

圧倒的な自然を前にして、いかに人間の暮らしを築いていくかわゆる〈漂流もの〉を読むと、そこには人の、根元的な営みの喜びが描かれていると感じることがありますが、いきいきとした少年たちが主人公の本作は、とりわけそうです。炭火であぶった

肉の何とうまそうなこと！住まいを整えていくくだりの、何と楽しそうなこと！

いつの時代も読者の胸を熱くしてきた傑作を、新訳でお届けします。ぜひご一読を！



(須藤)

宮崎駿監督が語る少年文庫

「生まれてきてよかったんだ、と子どもにエールを送るのが児童文学」——。アニメーション界のトップランナーとして世界的に注目されている宮崎駿監督が、長年読み親しんできた岩波少年文庫の中から、お薦めの五〇冊を選んでくれました。思い出の一冊から、まだ読み切っていない作品まで(？)、選りすぐりの書目リストと、つい手にとってみたくなる魅力的な推薦文を、どうぞお楽しみください。

本書ではあわせて監督へのインタビューを収録(対談などからの再構成や、加筆部分を含みます)。自らの読書体験、児童文学の挿絵の魅力、アニメと原作の話、そして震災後の世界についてなど、こちらも読みどころ満載です。「子どもにもむかって絶望を説くな」ということなんです」という、本への、子どもへの監督の熱い思いを、ぜひ多くの読者の方に受けとめていただきたいと願っています。



■本へのとびら

——岩波少年文庫を語る

宮崎駿著 【10月刊】

岩波新書・一〇〇〇円

岩波ジュニア新書で英語を

「中学の英語こそ基礎！」とよく言われます。ジュニア新書では、まさに中学・高校生にむけて、教科書とはひと味違った英語学習本を刊行しています。実はこうしたタイトルは、大人のファンも増加中。角度を変えて英語を学び直したい方におすすめてです。

■〈意味順〉英作文のすすめ(田地野彰著、七八〇円)

「だれが」「する(です)」「だれ・なに」「どこ」「いつ」という順序の決まったボックスに英語を入れていけば、英作文は簡単！英語は語順が重要であることに注目した画期的な発想を紹介します。

■語源でふやそう英単語(小池直己著、八四〇円)

語源から語彙を増やす方法をわかりやすく解説。「数」「人間」「自然」など、テーマごとに英単語力をチェックできます。

■アスリートたちの英語トレーニング術

(岡田圭子・野村隆宏著、八二〇円)

鈴木大地、増田明美、箕内拓郎、瀬古利彦、太田章。五人のトップアスリートたちが、世界の舞台で栄光をつかむまでの道程と、それぞれユニークな英語学習法を語ります。



(岩波ジュニア新書編集部・堀内)

【2011年 児童書新刊一覧】

● 岩波少年文庫

アーベルチェの冒険（シュミット作／西村由美訳）
バレエものがたり（ジェラス作／神戸万知訳）
ツバメの谷〈ランサム・サーガ2〉上下（ランサム作／神宮輝夫訳）
川のほとりのおもしろ荘（リンドグリーン作／石井登志子訳）
ビッグル・ウィッグルおぼさんの農場（ベティ・マクドナルド作／小宮由訳）
カイウスはばかだ（ウィンターフェルト作／関楠生訳）
長い冬休み〈ランサム・サーガ4〉上下（ランサム作／神宮輝夫訳）
ジム・ボタンの機関車大旅行（エンデ作／上田真而子訳）
ジム・ボタンと13人の海賊（エンデ作／上田真而子訳）
オオバンクラブ物語〈ランサム・サーガ5〉上下（ランサム作／神宮輝夫訳）
小公子（バーネット作／協明子訳）
アーベルチェとふたりのラウラ（シュミット作／西村由美訳）

◆ 絵本

ながいながいよる（パウアー文／ルウィン絵／千葉茂樹訳）
まちのいぬといなかのかえる（モー・ウィレムズ文／ミュース絵／さくまゆみこ訳）
古代エジプトのものがたり（スウィンデルズ再話／ランバート絵／百々佑利子訳）
三国志絵本 七たび孟獲をとらえる（唐亜明文／于大武訳）
三国志絵本 空城の計（唐亜明文／于大武訳）
カンガルーには、なぜふくろがあるのか アボリジナルのものがたり
（マーシャル再話／ファイアブレイス絵／百々佑利子訳）
ひみつの足あと（アルバレス文／ネグリン絵／神戸万知訳）
おさるのジョージ アイスクリームだいすき（M.&H.A. レイ原作／福本友美子訳）
モナ・リザをぬすんだのはだれ？（ナップ文／マックエルマリー絵／結城昌子訳）
トラのじゅうたんになりたかったトラ（ジェラルド・ローズ文・絵／ふしみみさを訳）

■ 読み物・単行本

ミルクマンという名の馬（ローゼンボーム作／木本栄訳）
ゲド戦記Ⅴドラゴンフライ／Ⅵアースシーの風（ル＝グウィン作／清水真砂子訳）
〈ヴィンニ！〉（リードベック作／菱木晃子訳／杉田比呂美絵）
②ヴィンニとひみつの友だち／③ヴィンニイタリアへ行く／④われらがヴィンニ
ペテフレット荘のブルック上下（シュミット作／ヴェステンドルプ絵／西村由美訳）
父さんの手紙はぜんぶおぼえた（タミ・シエム＝トヴ／母袋夏生訳）
イップとヤネケシンタクラスがやってくる！（シュミット作／ヴェステンドルプ絵／西村由美訳）
賢者ナータンと子どもたち（ミリヤム・プレスラー作／森川弘子訳）
新装版 道具と機械の本（マコーレイ／歌崎秀史訳）
子どもの育ちを支える絵本（協明子編著）
自分を育てる読書のために（協明子・小幡章子）

☆☆☆年末年始に読む本☆☆☆

年越しは、新鮮で特別な気持ちがあるもの。
そのときをとらえた物語をご紹介します。



〈絵本〉

◆ 十二支のはじまり (長谷川摂子文／山口マオ絵)

「元旦の朝、神様のやさしきの前にきたものに、一年ずつ年をやる」
とき、動物たちは大はりきりで出発します！

◆ しおふきうす (長谷川摂子文／立花まこと絵)

貧しい弟が一晩のうちにつばな屋敷をたてて正月を迎えた！
海の水はなぜ塩辛いかを語るふしぎな石臼の話。

◆ こぞうのはつゆめ (長谷川摂子文／長谷川義史絵)

初夢は人に教えてはいけません。こぞうが夢のとおりに姫様を
助ける痛快なお話。

〈読み物、少年文庫〉

■ 魔法のカクテル

(ミヒヤエル・エンデ作／レギーナ・ケーン絵／川西美沙訳)

おおみそか、その年の自然破壊の任務が果たせず、追いつめら
れている魔術師イルヴィツァー。なんとかするため、願いのかな
うカクテルを作ろうとしますが……。

■ とびらをあげるメアリー・ポピンズ

(P・L・トラヴァース作／林容吉訳)

「末ながく幸福に」のお話では、前の年が終わり、次の年がは
じまる。「すきま」の時間のふしぎが描かれます。

【編集後記】

▼ 『大きな森の小さな家』に始まるローラ・インガルス・ワイル
ダーの自伝的作品のシリーズがアメリカで出版されてから来年
で八〇年。小社では『長い冬』以降の五冊を「ローラ物語」と
し刊行しています。銀座・教文館ナルニア国では1月19日より、
パネル展や、谷口由美子さんの講演会、朗読と音楽を楽しむコ
ンサートなどが企画されています。ぜひお出かけください。

▼ 映画情報をふたつ。まずは、サトクリフの人気作『第九軍団の
ワシ』の映画が、来年3月に上映決定。さらに、トールキン『ホ
ビットの冒険』の映画二部作がいよいよ公開決定！「ロード・
オブ・ザ・リング」と同じ監督・スタッフによるもので、一作
目が来年12月に、二作目は再来年末に全国展開予定。

▼ 予期せず失われた日常生活の基盤を取り戻すということは、い
かに大変なことか。東日本大震災、福島原発事故から約九か
月。被災地の方々のご苦労は察するに余りあります。子どもた
ちにとって、本が楽しみや励ましの一助となりますように。

二〇一二年十二月一日発行〈第43号〉

【編集・発行】 岩波書店児童書編集部

〒一〇一八〇〇二 東京都千代田区一ツ橋一ノ五ノ五

電話 〇三(五二二〇)四〇五八・四〇六〇・四〇五七

FAX 〇三(五二二〇)四一二七

<http://www.iwanami.co.jp/hensyu/jidou/>

【印刷所】 サンパートナーズ株式会社